

商業学における人間像の問題

金 卷 賢 字

I ま え が き

近来経営学の興隆に伴って、その母体の学であった商業学は次第にその影を淡くしつつあるの観がある。もとより商業学は古き名称であり、いわば総合の名称であったので斯学の進展につれて分化がおこりその学問領域にもおのずからなる整備の行なわれるのは、けだし当然の成行であったであろう。かくていつしか商業学は総論としての地位を残すにすぎぬものとなった。しかも今やその総論としての地位をすら危ぶまれるにいたり、ただ僅かに商業入門としての存在を示すに止まる状態にある。斜陽もまた極まれりというべきであろうか。私はこの小論において、商業学が「商人論」を中心とする新しい構想と内容の下に再建せらるべきことを堯望しつつ一つの試論を展開してみようと思う。

II 商業学における「商人」論の地位

商業の歴史的変遷を通じて不易なるものの認識の結果として配給機能を得て、これをもって商業の本質と観ることは今日の通説である。すなわち商業は商品の配給を司ることによって営利獲得を目的とする組織である。かかる組織はその営利を獲得するために、一つの経営体として経済的活動を行なう。これが企業の経営である。このように企業としての商業は、経営体の活動とみられる。ところで個人経営の商業の場合についてみるに、彼は企業経営の主体として一切の計慮と指揮を行ない、同時に彼ひとりが総ての責任と危険とを負担する。すなわち資本の調達、経営の計画、内部の指導・統制と

業務の執行とがなされねばならない。これが経営者としての彼の任務である。ところで一人の商人によって行なわれる諸々の職能は、商業社会の進展と共にしだいに分離独立の気運に向かい、各々別個の経営体の形態をとって専門的に行なわれるようになる。かくて多数の異なる専門的な経営体が連鎖的に相互連関的に存立するにいたる。そうして、それらのいわば有機的結合の下に一団として諸般の配給機能を達成するものとなる。これが広義の配給の組織体である。——以上が最も普通に説かれている商業学の構造であり、またその輪廓でもあると称してよいであろう。

さて我々は上述の商業本質論より何を学ぶことが出来るであろうか。従来の商業学は、まず「商人」論より出発しながら商人をもって継続的な商行為者と定義し、ついで法人企業をもこれに包摂することによって企業経営者にそれを置き換える。このようにして商業学は企業論に溶融されて、やがて企業一般の経営論、形態論、組織論、機能論などとして展開される。就中、機能論が中心に据えられて商業の本質と目されるにいたった。例えば商法の規定に従って『商人トハ自己ノ名ヲ以テ商行為ヲ為スヲ業トスル者ヲ謂フ』にはじまって、以下商行為の解説をなし、さらに自然人のみならず会社そのものが商人であると論じられている。このように自然人と法人とを通じて商行為を業とするものは総て「商人」と見做される。その結果は、個人商人は商人の一形態として取扱われるに止まり、むしろ商人の他の形態たる法人企業体に重点が置かれる。とくに株式会社が商業経営の主要形態と目されるに至っている。もちろん現代の資本主義経済における大企業の優位については争いの余地はない。けれども今日においてすら中小企業は存在し、しかもその数は極めて多い。商業は商企業であるよりも、その本質において遙かに商人の業である。この意義において、商業が商行為を業として営むものであるとの規定は、あまりにも抽象的・概念的規定であり、また現象的・形式的な把握に止まるものと評するの外はない。そうして茲では、生ける活動体としての商人の人間論的な要素は、あまりにも捨象ないし疎外されているのである。

Ⅲ 「経済騎士道」・「企業者」・「商魂商才」

英国経済学界の巨匠アルフレッド・マーシャルは夙に『経済騎士道の社会的可能性』(1907年)と題する講演において、きわめて生彩に富む実業家の理想像を描き出すことによって我々に無限の示唆を与えている。即ちマーシャルは中世の戦争が騎士道に与えたような名誉が現代の実業界においても与えられるならば経済騎士道は大いに発揚されるに至るであろうことを期待して次のように述べている。

実業家は富を生産しそれを使用することによって、彼等の人間性の美しい要素を最もよく訓練することが出来て、誇りをもって自己の生活の向上を成しとげえたであろう。……西欧諸国においては最も能力を有する者の少なくとも半数が実業に従事していることは疑いのないところである。……一国の産業の進歩に貢献するような事業に従事している実業家達は、富そのもののために富を求めるよりも、むしろ事業成功の印としてそれを求める場合が多いということである。最も有能にして最も優秀なる実業家は、成功が齎らす金銭より以上に、成功そのものこそ価値ありとなすのである。……画期的大発明というものは、常に自己の仕事を騎士道的愛をもって愛するところの人々によって為されている。……自由企業の下にある世界は、経済的騎士道が発達をとげる以前においては、未だ最善の理想を欠くものとして低迷するであろう。……要するにこの世界には、一見したよりも遙かに多くの経済騎士道が存在しているのである。最も重要にして且つ進歩的なる事業経営は、大いなる騎士道的要素なくしては殆ど存在し得ざるものであって屢々主に騎士道的動機によって支配されるものである。……もしも次に来る時代が、近代的事業経営の方面において、真に創造的なるものまたは騎士道的なるものを探求し、これに名誉を与えるならば、世界は急速に物質的富においても、また人格の富においても発達するであろう。⁽¹⁾

(1) Alfred Marshall, "Social Possibilities of Economic Chivalry," *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A. C. Pigue, London, 1925. pp. 323~346. 杉本栄一編『マーシャル経済学選集』, 263~309 頁参照。

独乙経済学界の泰斗ヨゼフ・シュムペーターは有名な『経済発展の理論』（1912年）において経済循環と経済発展との識別を理論的に確立した。この認識の出発をなすものは、経済をその持続性と発展性において把握することであった。即ちシュムペーターによれば、まず経済は年々歳々本質的には同一軌道上の「循環」と観られる。しかるにこの循環はしばしば攪乱され、その軌道や規模は変化せしめられる。かかる軌道変化は与件の急変や生産革命などによって惹起されるものである。けれどもこの変化の性格は、純粹に経済的であり、経済体系内部の自発的なものであり、しかも非連続的である。これが「発展」である。かくて循環が或る均衡状態に向かう運動、すなわち「静態」であるのに対して、この発展は均衡状態そのものの推移であり、既存の重心から新しい他の重心への転位であり、いわば「動態」である。そうして発展は、生産経済および流通経済の場面にもみ現われ消費経済には現われない。しからば経済発展とは具体的に如何なるものを指すのであるか。シュムペーターは発展の形態と内容とを「新結合」(neue Kombinationen)と名付けて、次の五つを事例として挙げている。(1)新種の商品の生産、(2)新しい生産方法の導入、商品取扱いの新しい方法、(3)新しい販路の開拓、(4)新しい原料・半製品の獲得、資源の占拠、(5)たとえばトラスト化による独占的地位の形成のごとき新組織の達成、あるいは独占の破壊。ところで経済循環と経済発展とは、最もしばしば並存的に現われる。しかし現代のような競争経済においては、とくに新結合が旧結合を攻略することによって遂行されることが多い。社会主義経済においても、新結合は旧結合と並んで現われることは屢々あるであろう。ここにおいても新結合はその使用する生産手段をなんらかの旧結合から奪取し来らねばならない。ゆえに新結合の遂行は一般的規定としては、国民経済における生産手段貯蓄の転用 (Andersverwendung des Produktionsmittelvorrates) を意味する。

さて経済発展が上述のようなものとすれば、それは如何様なる現象形態をとるか。われわれが企業 (Unternehmung) と称するものがそれである。企

業は新結合の遂行であり、それは経営体という具体性をもつものとして現われる。そうして企業こそは、まさに経営者 (Unternehmer) によって営まれるところのものである。それでは「企業者」とは何か。シュムペーターによれば、企業者こそ新結合の遂行を自らの職能とし且つその遂行にあたって能動的な行動者となるがごとき経済主体にほかならない。けれども茲にいう企業者は、たとえば現代のような特殊なる社会的現象として存在するような特定の時代の企業者のみを指すのではない。むしろこの概念と名称とは、つねにその職能にのみ結びつけられねばならない。すなわち如何なる形態の社会であるかを問わず、事実上かかる職能を果たしているがごとき総ての個人にこれは結びつけられるであろう。時代の如何によって彼等が、たとえば原始的種族の首長であれ、封建社会の賦役農場の領主であれ、あるいは社会主義協同体の機関であるとを問わない。しかし翻っていえば、通常いわれているように自己の計算で行動をする独立的な経済主体の総てが、われわれの企業者概念のなかに含まれるとは言いえない。したがって例えばそれが農民、手工業者、自由職業の従属者であれ、はたまた工場主、産業家、商人であれ、彼等はずねに必ずしも「企業者」たるを要しないのである。もちろん企業者と資本家とは区別されると同様に、企業者は概念的に業主と峻別されねばならない。ところでかかる意味における企業者には、おのずからにして一つのタイプがある。それを特色づけるものは創意心、権威、先見の明などである。あまねく人口に膾炙されている「産業の将帥」(Industriekapitän)の語ほど、これの現代的典型を示す好個のものは他にないであろう。それは或る特定の人に冠された名ではない。如何なる経営者であれ、ひとたび創造せられたる企業をただ循環的に経営していく者は、いやしくも企業者たる性格を喪失するものである。また彼等が数十年間の努力を通じてつねに企業者として存続することの稀であるのは、恰もきわめて僅かなものとはいえ何等の企業者的要因をも有しない実業家の存在が稀なると相等しい。このように企業者たることは職業でない。また原則としては一般に永続する状態でもな

く、したがって社会現象の意味での階級ともなりえない。もちろん現代においては成功せる企業者およびその一族によって資本家とよばれる階級的地位は築き上げられてはいる。しかしそれは彼等の成功の私経済的な成果を物語るにとどまり、かつての時代の領主的地位と異なるところはない筈である。

企業者の行動とタイプの特長は、さらに幾つかが指摘されるであろう。その一は「洞察」である。何となれば経済循環の慣行軌道を経済発展の新軌道に導くのは凡庸の士のよくなし得るところでは無いからである。それはまさに指導者的精神とその活動に俟つのほかはない。事物を事前に明察する叡智、衆人に先んじて成算を予断する能力こそ企業者に課せられた第一の資質である。彼はしばしば視野の鋭さと共にその偏狭さをも示すであろうし、また勇往邁進の気魄と力量をも露呈して憚らぬであろう。彼はまた近代人的感覚、資本家的生活、没趣味な思考様式、功利主義、合理主義——まさに「ビフテキと理想」とをはじめて共通分母の上にならべる力と機縁とをもった頭脳の所有者でもある。その第二は指導 (Führung) である。すでに明かなように新結合の遂行は一つの特殊なる職能であり、そうしてこの職能を果たしうるものは少数者である。国民経済の指導者達は事業欲に魅せられた魂の所有者であり、その渴望は癒され難いほどに強烈である。彼は他になすべきことを知らないが故に絶間なく創造する。即ちかかる指導者達をいつも駆りたてるものは、彼の王朝を建立せむとする夢と意志とである。また闘争から成功と支配へのたえざる勝利者の意欲がある。そうして再びいうべきことは、創造の意志と行動についてである。彼は経済的戦場において、国民経済に変化をあたえようとするその冒険と困難⁽¹⁾に向ってあえて突進するのである。

わが国の碩学、故福田徳三博士はその著『現代の商業及び商人』(大正10年)のなかで「士魂商才」の語をうけて、次のような商人論を展開している

(1) Joseph A. Schumpeter, *Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung*, 1912, SS. 88~139. シュムペーター, 中山伊知郎・東畑精一共訳『経済発展の理論』145~233頁, 参照。

のは極めて興味ふかい。——かつて英国の大哲学者ハーバート・スペンサーは、ミリタリー・スピリット (軍事的精神) とインダストリアル・スピリット (産業的精神) とを区別した。もはや今日富を得ることを賤しみ、利欲を塵埃のごとくに見ることは許されない。むしろ「商魂商才」こそ、ひとり現代の商人のみならず総ての現代人に要求される資質でなければならない。古く基督教においては、商人的利益は罪惡視されていた。その理由とするところは一人が利益を得るのは、即ちそれに相応じて他の誰かが損失を蒙ると看做されたからであろう。けれども現代社会においては、功罪の判断はつねに大局的に全般を通じて行なわれねばならない。現代社会の利益は「一挙萬得」を意味する。商人というものは必ずしも利を争うものに止らず、むしろ「利益を創造」する機能をもつ。かつての和蘭や英吉利においては、商人階級に幾多の傑出した人材を輩出することができた。たとえば我々はサー・ウォーター・ラレーの名を想起することが出来るであろう。まさしく商人の任務は、「需要の創造」であり、また消費者の教育にある。このようにして国富の増進、人類の経済的幸福の増進が齎られる。かくのごとく商人は社会の先達たる義務を尽すべきものである。⁽¹⁾

IV 未生の商人像

以上三つの偉大なる先学の教説から、われわれは何を教びとることが出来るのであろうか。

第一は、商人の存在理由とその価値についてである。いうまでもなく商業の主体は商人である。商人は商業の主体者として、商業の本質者である。主体者は一個の不可分の存在であり、終始統一的な究極の一つの意志体である。このことは個人企業であると法人企業であるとを問わず形態がいかにならねようとも、原理的になんら異なることはないであろう。もちろん個人企業は一個の商人によって経営されるものであるが、法人企業といえども如何に

(1) 福田徳三、『現代の商業及び商人』(大正10年) 3~114頁。

それが巨大な企業体であるにせよ、その経営は企業の意志決定機関によって権威的に計画もされ、また実施されるに相違ない。およそ無人の企業体はなく、したがって経営意志を欠く経営組織体は存立し得ぬであろう。

ひとりの商人は一個の人間として、つねにまた究極的にその生涯を通して一個の生活者である。彼が商人であることは最もしばしば生業となっている。それは農民とその職業の関係と相似ている。もとより現代の自由社会において、いかなる職業を選ぶかは自由であろう。けれども事実、職業選択はあまり自由ではない。殆どの商人は彼の半生あるいは生涯を通して多くは商人である。そうして商人としての全生涯を通して、一人の人間としての生活を達成するのほかはない。古来、商業と商人とがどのように賤視され、また疎外されようとも如何なる時代においても商人と商業とは存在もし、また成立していた。ただ彼等の不幸は、人類の経済社会がいまだに公正な認識と評価とを与え得ぬ時代において既にかれらが存在し或いは成立していたことに由来するのである。かつての時代の倫理感や職業観が正常であったのではなく、国民経済の歴史的段階の支配関係が、いまだ彼等に支配者の地位を与え得なかったのである。

ところで商業が一つの生業であることは重大な意味をもつものと思われる。およそ如何なる人間であれ、彼は一つの特定の歴史的構造をもった社会に生まれ、その社会のなかで自己の天賦の稟性に生き、また生活環境のなかで啓発された資質に導かれつつ、さらに社会的に体得された知能とをもって全人的な生活の実践者とならなければならない。殊に現代のような経済機構の下においては、生活は職業と繋がり、その職業によってのみ彼のあらゆる名声、地位、富、勢威、権力などが齎らされるのである。このことは職業が単に職業たるに止るものでないことを意味する。「生業」こそまさに商人そのものの全生命であり、彼の生涯を賭しての全人的活動の構図を物語るものとなるであろう。もとより人間は如何なる天賦の稟性に生まれ、いかなる資質を陶冶され、またどのような知能を錬磨されるかは予め問われることでは

ない。彼はただその人生において何を為し、また社会において如何に行爲したかによってのみ語られるにすぎない。まことに現象の以前に本質はなく、したがって現象をはなれて本質を論じることが許されぬであろう。もし商行為の学を商業技術学と称することが認容されるとすれば、商人学は商業人間学でなければならない。商人と商業——それは主体とその機能にほかならない。

第二は、商人と営利についてである。古来、商人と商業とが極度にまで蔑視されたことの理由は、おそらく次の二つの事情によるものであったであろう。その一は彼等はいかなる時代においても多くは無資産であったし、また無権力であった。いかなる時代においても時の支配者階級からは遠い下層者であった。貴族、地主でもなく、農民ですらなかった。もし社会的地位が権勢や富有に繋がるものとすれば、生来の裸一貫と才能と敏捷さによって己れの生活に精根を涸らして走り廻る者の姿はいかにも哀れであり、小欲の虜にすぎず世の悔りと賤みの眼に曝されるの外はない。その二は彼等が時として富の獲得に成功することである。富者はしだいにあやしい黄金の光彩を身に帯びて、世の懐疑と畏怖とを招くものとなる。かかる異様な存在の出現は、守旧と慣行になれた衆人の目には、すくなからぬ不安と動揺感と共に嫌悪の情をすら与えずには措かぬであろう。いつの時代においても無力であり無気力に社会の既成の階層に隷従して小我の生活に狎れた者達にとっては、富者の出現は明かに一つの脅威であろう。それはまた嫉妬感を誘発する。社会における衆人の感情の激化は、往々にして彼等の生活基盤の動揺感に縁由することが少なくない。商人の出現とその活動とは、彼等に無関心ではありえない動揺感をもたらすに相違ない。そのためにこそ詭計、詐術、冷酷、強欲、傲慢などのあらゆる非難と怨嗟の声が容赦なく浴せられるのである。しかも成功の途上にある商人はただ富める者にすぎず、いまだ一世を支配するにたる社会的権勢と階級とを構成するに到ってはいない。世の批判があげて彼等に傾注するのは、まさにこのような状況においてであろう。もしも商人

の社会的階層が牢固たる基盤をかちえて、時代の支配者たる権威に立つにいたれば、おそらく商業のうけるべき社会観ないし倫理観は従来とは著しい変貌を告げるであろうと思われる。

商人の目的は営利である。それは商人たる個人の目的であると共に、また商業一般の究極の志向でなければならぬ。およそ企業は利潤をはなれては成立しない。そうして企業としての商業は、それゆえに企業中の企業と称されてよいであろう。何となれば農業や工業にせよ、それらは土地や設備を必要とし又それらなくしては成立し得ない。けれどもひとり商業は無にして存立しうる企業である。いくらかの資金あるいは店舗、施設などは勿論用いられる。しかし商業利潤をもたらすものは商人の人間の活動に外ならない。尤も商業上有利な位置に店舗を構えて行なわれつつある商業からは普通の経営利潤は産み出されるであろう。それは恰も農業や工業が普通の経営利潤を業主にもたらすのと異なるところはない。何となれば農地は農業者によって占有されてをり、また工業の生産施設はいうまでもなく彼等の所有である。生産とその分配とが生産設備の所有関係に従属し、そうしてその所有に由来することは争いがたい根源的な本質関係である。われわれは経営と企業とを峻別すべきことを上述のシュムペーターに学んでいる。利潤また然り。すなわち経営からは経営利潤が生まれ、企業からは企業利潤が生まれる。そうして商業経営からは商業の経営利潤が生じ、商人の企業的活動からは商業における企業利潤が獲得されるに至るであろう。「営利」とは、もちろん両者の総称である。

営利を追うことが商人たる者の生業目的である。なにが故に営利行為が一つの学問の対象となり得ないのであるか。致富は人間の科学の世界よりは絶対に疎外されねばならぬものなのであるか。商業の社会的機能をとらえて配給機能を本質とみることは、おそらく経済学を社会科学と規定する方法論的系譜に従うものであったのであろう。けれども商人の学としての商業学は一つの私科学に外ならない。それは商人の人間性や意欲ないし能力や行動な

どに関する研究や体系的把握に向けらるべき人間研究の価値記録としての成立を約束するであろう。

第三は、商業社会の形成に関してである。無産にして社会に生きる道は労働者となるか商人の途を選ぶかの孰れかである。誰れでも徒手空拳にして商人となることが出来る。また身体の適性に欠けて労働者とすらなり得ない者といえども、一介の小商人となることはけだし容易である。かくて微力な魯銭な者から稀有の大商人にいたるまで、この道は人を選ばない。ただ彼等はひとしく全能力をしぼって終生孜々として努めねばならない。何となれば此の世界は、つねに過剰の人員にあふれる自由競争の、角逐の混乱のひらかれた闘場であるからである。賢愚俱生、ときに厘銭をあらそい、また時に大利に往生しうる狂瀾の巷である。もとより此の営利の世界には悪業は多い。けれども諸悪もまた人世の相と観ずれば、商業はその悪業のゆえのみに一途に非難されるべきものでもあるまい。利を追い、利に趁る途は、つねに競争的であり、排他的であり、また術策的であるであろう。おもうにそのことはすべて人間の儂ない生の根源につながり、そこに盤根をもつというべきであろうか。まことに衆愚の罪業は慈悲の前にある。利に起き名にねて、つねに成敗の岐れに我運をかけて熄まない者の姿がそこにある。

近世資本主義の成立以来、商人の存在は巨大となりつつある。商人が実業家あるいは資本家ないし企業家と呼ばれようとも、その本質における存在の意義は毫も渝るところがない。商人精神の貫かれて作用する場に商業は成立し、そうして今や現代はそれに自由と権威とを認容する時代となっている。シュムペーターが「私的王国」あるいは「王朝」と名づけたものは企業家が本能的に造成しようとする一つの天地と権力の帝国を示すものであった。「われわれは日常、国民経済の指導的人物や経済的運営において衆に挺んでいる人物が、一般にはなはだ速かに巨大な財産を支配しうるに至ることを観察する。しかも彼等はここに止らず、さらにその全力をより多量の財貨の獲得に捧げ、はなはだ屢々他の考に余裕を与えていないことを見る」と指摘して

いる。それは他の表現をかりていえば、勝利者意志と創造の喜びとである。

まさしく私富が国富に通じてをり、あるいは一人の致富が国民の経済的幸福につながり得るところに大道が拓かれていく。ときにそれはいみじくも、「一挙万得」と道破された。人々は資本主義経済のメカニズムについて云為することはあまりに多いが、資本主義の人間関係に論及する例は稀である。社会と歴史とは人間によって形成されている。その人間の基体は個人である。そうして個人はつねに生と死を運命とし、強弱賢愚に差をもち、また成功と失敗との列序を免れることは出来ない。しかも彼等はおのれの職業に携わりつつ果敢に生涯の努力に一身を献げてやまない。すでに引用したマーシャルの言にしたがえば、実業家とは富の生産者であると共にその費消者である。その人はこのような二つの行為の把持者としてその間に処して、彼の全人間性を剩すところなく発揚することができる。「経済的騎士道」とは、まさしくかかる存在の在り方を示すものであった。生産と消費との人間的な統一性において、はじめて人はその全人の風貌と能力とを極致において示し得るのである。時代を支配し社会を構成する真の实在は外ならぬ人間そのものであり、精神と行動との全き自由の存立する社会のみが、特定の段階における最良の歴史の開花を飾ることができるのであろう。

あ と が き

私は別の機会を得て、最近における商人論を紹述したいと思っている。近刊のワーナー・マーチン共編『実業家——⁽¹⁾経営者層と業務組織』は、米国の産業界における商人研究の好著である。

(1962年9月3日)

(1) *Industrial Man, Businessmen and Business Organizations*, edited by W. Lloyd Warner & Norman H. Martin, 1962.